

環境・技術存在論分野

Ontology of Environment and Technology

分野の特色

人間は、あまりにも多くの問題に直面して、茫然自失しているように見える。遠くの景色を眺めながら、自分の場所を探している。

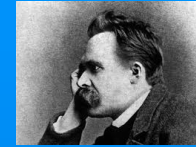
手がかりは、まず環境と人間の根源的な関係のネットワークを思考することにある。

誰もが環境の中にしか存在できないという意味で、われわれは環境存在である。だが、それはいったいどのような「環境」なのだろうか？ そしてその環境と「関係する」とはどのようなことなのだろうか？

これら問いを中心に、人文学と近代科学のダイナミックな相互関係が繰り広げられる。従って、この分野は、思想史・文化史と自然・技術史の双方への包括的な「存在論的アプローチ」を特色とする。



環境存在論



1) 近代ヨーロッパ思想は、自然から脱落し疎外された存在としての人間を発見した。スピノザ、ルソー、カント、ニーチェ、フロイトなどなどの思想を辿ってみよう。

2) 環境と人間を媒介するものは何か？ 環境から人間は「排除」されている。だとしたら、環境と人間はどうやって「関係」したらいいのか？ 例えば、大川と橋上の人間はどう「関係」しているのだろうか？ 恐らく、画面を斜めに走る驟雨の線が媒介しているのだ…… 水から雨へ、線から橋へ、そして人間への運動。その逆の運動も可能。これはヒントになるだろう。



技術存在論

1) 人間と環境を媒介するのは、技術。この観点からは、文化・文明(記号・象徴)の総体も技術の一つだ。

ポストモダン思潮や現代思想(シモン・ドゥーレー、フーコー、ドゥルーズ、デリダ、ステューグラーなど)から手がかりを得よう。

2) 現代技術に対して人が感じる不安と憂鬱は、技術が人間と環境をもはや、あるいはまだ、媒介していないという不満に起因するだろう。破局への誘因に抵抗する手段はあるのか？



環境・技術存在論

- ・ 人間と環境を媒介する技術を、文明・文化・記号・象徴の彼方から、つまりは存在論の次元すなわち根源的な関係性から考えること、それが現在の存在論的憂鬱から脱するためのヒントとなるだろう。
- ・ そう考える人なら一緒に、新しい研究分野を開拓し構築していきましょう。